

実施日 : 2022年7月10日(日)

実施地 : 烏原貯水池周遊路

テーマ : 神戸の上水道施設の歴史と周辺環境を観る

集合 : 神鉄鷓越駅 10時

コース : 鷓越駅～三日月橋～烏原貯水池南岸周遊路を東へ～立ヶ畑堰堤～
周遊路北岸を西へ～三日月橋～烏原川を北上～縦走路～鷓越駅(解散)

解散 : 15時

観察会参加者数 : ビジター39名 会員38名(うち6班17名) 総数77名

班体制 : 1班吉野リーダー 2班幸田リーダー 3班東條リーダー
4班长谷川リーダー 5班(会員班)安岡リーダー

【観察会解説概要】

烏原貯水池は明治30年代に布引貯水池とともに神戸の上水道施設として完成しました。
以来今日まで神戸市民に上水道を供給し続けています。



明治25年、コレラや感染症が発生したことをきっかけに上水道の敷設計画が進められます。
明治30年布引と烏原で貯水池建設に着工。しかし烏原村の住民は立ち退きに猛反対でした。
烏原村の住民は昔から水車を利用して、タブやクスノキの樹皮、スギの葉を臼で細末にして
線香の原料粉を生産することを生業としていました。

品質が優秀で、日本一の生産量(全国シェアの70%以上)を誇る淡路島の線香づくりを支えて
いました。

その烏原村の全村が貯水池の底に沈むことを知り、住民が立ち退きに猛反対したのです。
一方布引貯水池は全国初の水道用ダムとして完成。明治33年給水を開始しています。

生田川と湊川の間、全市の12%への給水でした。

明治37年、烏原村では12年の時を経て住民414人の立ち退き問題がようやく解決。

明治38年、烏原(立ヶ畑ダム)の給水が開始されることとなります。

貯水池の護岸にはそれまで使っていた石臼を160個、約90メートルにわたって埋め込み、線香の原料粉づくりの足跡を残すことにしました。



布引・烏原貯水池は完成したのですが、大雨が降ると大量の土砂が流れ込み、貯水池としての機能が徐々に失われていくことをのちに知ります。

そこで坪野神戸市長は本多静六に砂防造林の計画・設計を依頼。

本多静六は「水源涵養林」の造成と砂防工事の実施を提唱し、

明治36年～39年六甲山の植林を実施します。

再度山から生田川、烏原川の源流域を中心に植林を開始。

クロマツを中心に20種類の樹木を植林。

クスノキ(樟脳採取)、ハゼノキ(木蠟採取)、クリ、クヌギ、コナラなど常緑、落葉、広葉、針葉を混植していきます。

四季の美しさ、森林経営も考慮しての植林でした。

この事業により禿山であった六甲山に緑が蘇っていくことになるのです。

多くの人々が知る通り六甲山は明治36年以前は見事な禿山でした。

禿山に雨が降ると雨水はあっという間に海へ流れ落ち、しかも山肌を削り多くの土砂を下流へ流し込んでいきます。

それを防いでくれるのが山の樹木です。

樹木の根は土壌をつかみ土砂の流出を防いでくれます。

このような目的でつくられ守られている森を『水源涵養林』といいます。

まず今回の集合地点である駅近くの公園で『水源涵養林』の姿を見ることができました。

おそらく明治時代に植えられた樹木が伐採されることなく今日まで残ってきたのでしょう。

林立したエノキ、ムクノキ、アキニシ、クヌギそしてクスノキの大木がそれです。

貯水池の周遊路でもエノキ、ムクノキ、アキニシ、アカメヤナギなどの大木が見られます。

私たちにとっての命の水は植物たちが生み出してくれているのです。

集合地点付近の森の大木たち エノキ、クスノキ



午後からは立ヶ畑堰堤を渡り北岸へ。



改めて満々とたたえられた貯水池の水とそれを取り囲む豊かな緑を確認。



北岸を少し歩くと斜面途中に巨大なユーカリが1本立っています。
一説には断層のある場所に目印としてかつてユーカリが植えられたのだといひます。
しかしこの説の真否は不明とのこと。それにしても巨木であることに間違いありません。



さらに進み、舗装路に出てそのまま烏原川沿いに北上。
珍しいヒメイタビを見、一旦縦走路に上がり、神鉄鶯越駅に向かう。
15時、朝集合した公園で各班ごとに流れ解散としました。

(終)